

〔資料〕

津和野 総霊社蔵『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』翻刻〈下〉

The Yuishogaki of Washibara Hachimangu Shrine and its Guardian FUKUBA Clan, Tsuwano:  
Decipherment and Annotation (2)

福田道宏\*

FUKUDA Michihiro\*

はじめに

二〇二四年四月七日、昨年に引き続き今年も鷲原八幡宮の流鏑馬神事に出かけた。土の馬場を駆ける馬の蹄の腹に響く低音と的を射た矢が当たる甲高い音、参拝者の歓声。昨年は当日でも残っていたわずかな棧敷席を購入出来て馬場の間近で観られ、その分、移動は出来ず自席で立ち上がるのが精いっぱいだったが、今年も席が早々に完売したと聞き、諦めて棧敷後方の立見席で、その代わりに移動しながら迫力を堪能することができた。観光客の人の出も多く、特に外国人観光客が目立ったことが印象的であった。

さて本稿は、前号に引き続き、鷲原八幡宮に伝来し、現在同社宮司を兼帯する総霊社が所蔵している古記録を翻刻紹介するものである。前稿で述べたが、表題にも用いた古記録のタイトルは今回翻刻紹介するにあたり、稿者がつけたものである。その意図するところ、原史料の概要、成立の経緯、また、そもそも鷲原八幡宮とは何かについては前稿を参照されたい。今回の翻刻でも、前回の解題でも書いたように、河野晃氏によると思われる手稿本「八幡宮古文書解説」と、今回原本から翻刻したものの間で校合を行った。校合の結果、字の読みに関して数

か所を除き、ほぼ見解に違いはなく、表記上の助詞の扱いや、用字に若干の違いはあるが翻刻凡例に示した原則に基づき翻刻を行った。また、河野本が補っている点、一・二点などは用いず、原本の改行箇所も平出を除き、採用しないことにしたことを申し添える。

さて、今号では、それぞれ別の時期に記され、のちに合綴された原史料四冊のうち前号に続く、残り二冊を翻刻するとともに、前号に翻刻を掲載した分の内容も含め若干の解題を付することにする。具体的には、前稿掲載分と今回掲載分の翻刻に現われる鷲原八幡宮大宮司の叙位任官について、前稿の翻刻の注でも紹介したが、改めて外部史料、すなわち稿者が専門とする宮廷側の史料をもとに検討しておきたい。特に今号掲載分には道中日記ではないものの、叙位任官に際し、主家亀井家に暇を願い出て、京都に赴いた具体的な記事がある。つぎに、今回掲載の第三冊の後半から第四冊にかけて、増加する公的神事について若干触れておくことにする。これは単純に公的神事をすべき機会の増加、もしくは亀井家にとつての鷲原八幡宮大宮司福場家に神事を命じる回数が増加した、つまり当社の重要度が向上したととらえるべきか、単に前二冊では省かれて書き出されなかったも

\* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科教授

のかにはわかには判断しがたい。とは言え、前回の二冊との比較において、内容上の大きな相違点とも言える。

# 鷲原八幡宮大宮司福場家歴代の叙位任官について

『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』には福場家歴代の事績が書き留められ、そのなかには受領名風の名乗りではなく、実際に宮廷より任官した例がある。まずは福場家歴代について第二冊の表記に従い確認しておくこと次のようになる。

- 中興初代 大宮司福場千郎治家
- 二代 福場八太夫治光
- 三代 福場弥九郎治興
- 四代 福場左衛門大夫治茂（第一冊では重吉）
- 五代 福場左京進治行
- 六代 福場刑部太夫重次
- 七代 福場左衛門太夫重治
- 八代 福場右近太夫治次
- 九代 福場左衛門太夫治重
- 十代 福場左京進治次（民部と改称）
- 十一代 福場主膳重長
- 十二代 福場信濃治長
- 十三代 福場市正治裏（もと筑後守治家、任官土佐守、のち市正と改称）
- 十四代 福場土佐守治行

同じ諱があったり、第一冊と第二冊とで若干の異同はあるが、古い時代に関しては第二冊で書かれているように寛文五年（一六六五）八月十二日の火災で「古書・系図・御許状等」を失ったため、あやふやな点もあったようである。以下、今回翻刻の第三冊・第四冊から書き出すと、

- 十五代 福場飛騨守美唯
- 十六代 福場出羽介広淵

で第三冊は美唯、第四冊は広淵の代にまとめられたものである。ちなみに第二冊では十代治次以下の各代の上に「御裁許状頂戴之」と注記する。これは文面からすると鷲原八幡宮大宮司の裁許状ということで、近世、神道の本所とされた吉田家から発給されるものである。

さて、では正式な手続きを経て、叙位任官したのは誰からか。第二冊の十三代治裏の条には、

信濃嫡子、始筑後守治家<sup>与</sup>、其後任官 御裁許状被下、任官之節、御綸旨頂戴、土佐守受領、其後改市正との注記があり、本文中には

筑後守儀六位任官之儀御願申上御聞届、例之通寺社奉行所<sup>々</sup>御添簡被下、同「宝暦」八年寅六月上京、吉田表御取沙汰、正六位土佐守昇進仕候、

とある。つまり、「筑後守」は正式なものではなく単なる名乗りで、宝暦八年（一七五八）に正式に叙位任官したものとわかる。先代の福場治長は「信濃守」や「信濃介」ではなく、「信濃」とのみ記され、正式な任官ではないと考えられ、いま確認出来るなかでは十三代治裏が福場家における宮廷からの叙位任官の初例である。外部史料にあたるなら、国立公文書館蔵（内閣文庫）『大外記師資記』第四冊の同年十月十三日条に以下の記述がある。<sup>(1)</sup>

十三日 丙寅 晴

- 一、今日辰刻、頭弁亭、宣旨一卷正六位下藤臣治裏任土左守事、以家来令付也、
- 一、入来、宣旨頂戴為礼

石見国鹿足郡

八幡宮大宮司

正六位下土左守藤原治裏

太刀 一腰

馬代 百疋

右如例、吉田二位被副使者、令落手、

引用の『大外記師資記』は宣旨などの発給に関わる実務官人押小路家の古記録のなかに含まれる資料群で、当該期の当主押小路師資が筆者である。六月の叙任の際の宣旨発給に対する礼として、吉田家の副使を伴い、治裏が押小路家を訪れ、太刀・馬代を贈っている。

その後、市正と受領名風の名乗りに改めた時期と理由は不明だが、『鷺原八幡宮・大宮司福場家由緒書』第二冊の治裏の条によれば安永三年（一七七四）、紀州から淡嶋大明神を勧請した際には「市正」と書かれており、また次代の治行が同じ「土佐守」に安永二年（一七七三）任官していることが理由となったかもしれない。治裏は天明二年（一七八二）隠居を願い出、十月三日願いのとおり治行の相続が認められ、同七年十月に没する。

では、父と同じ土佐守を名乗る十四代治行は正式な叙位任官を外部史料で確認できるのか。『鷺原八幡宮・大宮司福場家由緒書』第二冊の治行の条には、

始志津江、又改庫之介、

其節任官、

御綸旨頂戴、

とあり、初名は志津江でのちに庫之介と改め、任官して綸旨も頂戴したとある。

「綸旨」は「宣旨」の誤りか。本文中では、

一、安永二癸巳年上京、継目仕、正六位土佐守任 官、尤伝奏之儀<sup>者</sup>武家伝奏御家<sup>二</sup>御座候、罷帰候上、同年十二月年始 御札之儀願出候処、翌三年午ノ年始御札被為受候、嫡子席之儀思召有之<sup>三</sup>付、桑原若狭守次席<sup>二</sup>被仰付候、相続キ毎年始 御礼申上候、<sup>并</sup>御参勤 御送迎罷出候、

とある。これを見ると、安永二年（一七七三）に上京したのは叙位任官だけでは

なく、「継目」つまり相続を吉田家に認めてもらうためであった。藩主亀井家が相続を認めたのは先述のとおり九年後の天明二年（一七八二）なので、「継目」とは齟齬するが、亀井家中での正式な相続以前に叙位任官を急いだ理由は、本史料で「祇園社」と書かれる現在の弥栄神社の乗原家との席次をめぐる争論に有利に処するためだろう。実際、右の引用の後半には鷺原八幡宮大宮司嫡子の席について、思召しにより、このときは桑原若狭守の次席と定められている。なお、前号に掲載の翻刻では「次席」とすべきところを変換ミスで「事績」と誤ったことをここにお詫びして訂正する（前号二五頁下段二一行目）。

ではこの叙任は外部史料から確認可能か。前出の国立公文書館蔵『大外記師資記』第二十冊の安永二年五月二十九日条には、

「五月」廿九日 丁亥 晴

「略」

一、今晚頭柳原中納言、社家 宣旨以一通被下知、宣旨四通下知、到来来月二日迄、同日野頭弁へ可附旨也、記于左

安永二年五月廿九日	宣	從五位下藤原宗茂	宣任若狭守
同	年同月 同日	同	源 義明 宣任長門守
同	— — —	同	從六位下藤原治行 宣任土佐守
同	— — —	同	從五位下藤原守海 宣任肥後守

りあり、ほか三名の各地の神職とともに宣旨発給が書き留められる。これによれば、今回は公卿柳原家から押小路家にまとめて持ち込まれて発給を命じられている。柳原中納言は柳原紀光である。宮内庁書陵部が所蔵する彼の日記『愚紳』の同日条には泉涌寺の火災の記事のみでなにも記述がないが、『大外記師資記』第二十冊の同年六月三日条には、

「六月」三日 辛卯 雨

一、社家入来、肥前国松浦郡乙宮大明神主美濃守橘祇芳・参河国渥美郡神明神主肥後守藤原守海・石見国鹿足郡鷺原八幡宮大宮司土佐守藤原治

行・豊前国中津六所大明神大宮司若狹守藤原宗茂・豊前国中津豊日別国魂神社大宮司長門守源義明等、今度任官<sup>二</sup>付、宣旨頂戴為礼金五百足持参、太刀・馬代、人別百足宛也、例之通、吉田家使添畢、

<sup>(3)</sup>とある。吉田家の使いとともに押小路家を訪ねた五人の社家が列挙される。太刀・馬代を差し出しているのは前回と同様である。

つぎに今回翻刻紹介する『鷺原八幡宮・大宮司福場家由緒書』第三冊・第四冊にみる福場家の叙位任官について外部史料と併せて紹介する。当該二冊の巻末・および表紙を見るとそれぞれの筆者と宛所、成立年がわかる。第三冊は文政十一年（一八二八）八月付で十五代福場美唯から増野一馬宛、一方、第四冊は嘉永七年（一八五四）四月付で十六代福場広測から小野寺藤太郎宛である。第四冊は美唯の文政十一年以降の事績から始まるので、前冊を書き上げ、提出したあと、天保十年（一八三九）に没するまでのことを養嗣子広測が書き上げ、続けて広測自身の嘉永七年現在までの事績を書き上げたものである。

叙位任官については第三冊に美唯の叙任、第四冊に広測の叙任の記事がある。それぞれ見てみる。

第三冊の美唯の条には

一、享和二年戊戌年、先達<sup>而</sup>上京之儀御願申上候之處、此度願之通御免被仰付、繼目上京仕、於吉田表、正六位上飛驒守<sup>与</sup>任官仕、罷歸候<sup>而</sup>以<sup>来</sup>、年始御礼等申上候、

とある。注目すべきは「吉田表」において、とあることである。執筆した吉田家で任官したと記しているのである。もちろん、叙位任官は宮廷が行うものであるが、本人は参内したりせずに、吉田家で位記・宣旨などを受け取ったようである。また、ここには上京の日付はもちろん、叙位任官についても日付が一切ない。そこで、叙任にかかわる披露職事の発給した宣旨などを書き留めた、京都大学附属図書館蔵「平松文庫」のうち『職事方御切紙留』の第二冊、享和二年（一八〇二）の冊を見てみる。すると十二月十九日・二十日条に福場美唯の叙任を見出すこと

が出来る。<sup>(4)</sup>

享和二年十二月十九日 宣

〔略〕

石見国鹿足郡

鷺原八幡宮社司

藤原美唯

已上叙正六位上

〔略〕

享和二年十二月二十日 宣

石見国鹿足郡

鷺原八幡宮社司

正六位上藤原美唯

任飛驒守

本史料については『広島女学院大学論集』第六四集（二〇一七年）に掲載の拙稿「京都大学附属図書館蔵『御用帳雑記』ほか公卿平松家記録にみえる絵師の顔ぶれ」<sup>(5)</sup>で絵師に限って紹介したが、その後、兄玉唯が二〇二一年十二月、広島女学院大学に提出の卒業論文『中国地方における神社の文献史的比較研究』<sup>(6)</sup>で近世の神職の叙位任官に触れるなかで使用し、右の引用箇所についても紹介している。他史料にもあたると、ここまで何度も引いてきた国立公文書館蔵『大外記師資記』<sup>(7)</sup>の筆者押小路師資の次代にあたる師武の同館蔵『大外記師武記』<sup>(7)</sup>の同年の冊である第三七冊をみると、この年は日記が十一月二日で終わっており、残念ながら十二月十九日前後の記事はない。ただし、神職の叙任記事は散見される。たとえば、同年二月十七日条には、

一、社家二人入来、為 宣旨頂戴礼、太刀一腰・馬代金百匹つ、持参、吉田二位副使如例、

とあるが、ここには「社家」が誰なのか具体的には記されない（六月二十五日条・



七月三十日条などはかでも同様。前出の『職事方御切紙留』で前後を見ると、二月十四日として「伊予国伊予郡」の「正一位稻荷神社」の藤原盛富と「上野国勢多郡」の「正一位産泰神社」の藤原恭富がそれぞれ摂津守・豊前守に任じられたことが書き留められ、これと同じか。

さて、つぎに広測の叙位任官だが、『鷺原八幡宮・大宮司福場家由緒書』第四冊に載る。

一、天保十一庚子年三月、継目・位階仕度<sup>二</sup>付、上京仕度旨、御願申上、先代飛驒守儀御銀三貫五百目拝借被仰付、上京仕候<sup>三</sup>付、先年之通御銀拝借御願申上候所、御厳法御時節柄<sup>二</sup>付、此度御銀三貫目拝借被仰付、貳貫目来丑年今二百目宛拾ヶ年之年賦、残壹貫目大坂於御役処御取替被仰付候<sup>而</sup>、当暮返上仕候様被仰付、難有仕合奉存候、依<sup>而</sup>四月廿五日出立仕、日数百日御暇御願申上上京仕、七月廿七日参内仕、位記・口宣・宣旨頂戴仕、兼<sup>而</sup>御願申上置候通、出羽介<sup>与</sup>名相改、八月十二日帰着仕候、

とある。ここには父美唯と異なり、「七月廿七日参内仕、位記・口宣・宣旨頂戴仕」とあって、宣旨・位記・口宣案は御所に参内して受け取ったとある。

この時期、天保十一年（一八四〇）については京都大学附属図書館蔵「平松文庫」のうち『職事方御切紙留』の記載期間の範囲外であり、また、国立公文書館が所蔵する押小路大外記家の歴代の日記でも当該年がない。すなわち押小路大外記家の前出の師武の次々代師徳とその子師身が天保十一年を活躍期とするが、前者は文政八年（一八二五）のあと天保十三年（一八四二）まで飛んでおり、後者はそもそも文政十年・天保七年・同八年（一八二七・三六・三七）の三冊しか残っていない。ほかの公卿や官人の日記などの確認は今後の課題といえる。また、後述のように、執奏を行った吉田家の側の史料により詳しい記述のある可能性もあるだろう。

ちなみに、ここで紹介する『鷺原八幡宮・大宮司福場家由緒書』とは直接かか

わらないものの、福場家と争論を繰りひろげた祇園社（現弥栄神社）の桑原家でも叙位任官しており、それが席次を決める争論の種にもなっているので外部史料で一件だけ確認してみる。すでに福場治裏の正六位下土佐守叙任、同治行の従六位下土佐守叙任でも用いた国立公文書館蔵『大外記師資記』第三冊の宝暦七年（二七五七）四月二十一日条に次の記述がある。<sup>(9)</sup>

〔四月〕廿一日 壬午 大雨下、入梅

〔略〕

一、入来、宣旨頂戴為礼

石見国鹿足郡祇園社大宮司

桑原若狭守

太刀 一腰

馬代 百疋

持参、吉田家分副使口上有之、如例、

福場家の叙位任官のルートと同様、吉田家を介したものである。この叙任については前回翻刻の『鷺原八幡宮・大宮司福場家由緒書』第二冊の治裏の条で、さきに本解題でも治裏叙任の際に引用した部分の直前にその経緯が示される。すなわち、

一、宝暦五年亥六月、祇園大宮司桑原清女分座席之儀<sup>二</sup>付、新規之儀申聞及争論、達御聴候得共、不相片付候内、同七年丑春、清女致上京、六位若狭守昇進仕候、

というものである。翌年の福場治裏の叙位任官はこれへの対抗措置であった。桑原家は現在も本史料で言う祇園社、つまり七月二十日・二十七日の鷺舞神事で知られる弥栄神社の神職を勤めており、同家所蔵史料にこの間の事情が記されないか、今後の課題としたい。

永い泰平の時代が続き、身分が固定してゆく徳川政権期を中心とする近世にあっても、武家も公家も、社寺のような宗教とそれにかかわる宗教者にも、地位の上昇を目指す動きはあった。堀新・深谷克己編『権威と上昇願望<sup>(10)</sup>』に収められた各論がそれを活写するが、なかでも井上智勝「社家（神社世界）の身分」では国家祭祀の対象社に限って社職や位階がどのように決定し、また機能したかを論じて

いる。また、同じく井上の著書『吉田神道の四百年―神と葵の近世史―』<sup>(1)</sup>では、本解題でもふれた神道本所の吉田家をその起こりから隆盛と零落、その後の再興について一般読者向けに紹介する。

本解題でも両書を参考にしたが、本稿で紹介するような、全国にある地方の神社の神職について吉田家の支配が法令として確立するのは、井上が吉田家の再興と位置付ける「諸社禰宜神主法度」（一六六五年）によってである。つまり、この法度から九十年を経て、津和野の祇園社・八幡宮の大宮司が相次いで吉田家の執奏で叙位任官し、またそれ以前からかもしれないが、裁許状のような文書の発給を受けていたのである。地方の神社に伝来の史料と、宮廷側の史料が一致するこうした事例の発掘はこれからの課題といえる。なお、吉田家に関しては井上も参加した科研費基盤研究「吉田神道家「御広間雑記」の記載項目のデータベース化と神道記録の研究」（代表者幡鎌一弘、二〇〇三～〇五年）とその継続研究があるが、天理大学附属天理図書館には吉田文庫約七〇〇〇点、一〇〇〇〇冊が所蔵される<sup>(2)</sup>といふ、『吉田文庫神道書目録』によれば『御広間雑記』は慶安三年（一六五〇）から明治二年（一八六九）までの六六九冊がある。

この吉田家伝来の『御広間雑記』をみれば裁許状に関しても具体的な様相が明らかになる可能性があるが未見である。正式な叙位任官よりも前の十二代以前について同史料を確認する必要があるだろう。

### 近世後期、鷲原八幡宮はじめ津和野の諸社の公的神事

本史料には鷲原八幡宮はじめ、同社福場家が所管する境内外の多数の神社での神事が書き留められる。そこに現われる神社のかなりの部分は現存しないが、境内外に如何に多くの神社があったかを、つまり、近代の国家神道の体制下での合祀以前の、前近代の津和野における地域と神社のかかわりが見えてくる。

また一方で、近世の幕藩体制のなかで神社が果たした役割も垣間見える。特に、今回翻刻を掲載の二冊には、たびたび神社奉行から、或いは藩主からの命で行わ

れた神事の記録がある。ここである「公的」とは、今日の「公」の概念とはかなり異なるが、藩主やその一門（世嗣や正室・元当主）からの命で、或いは奉行所を通じて命じられたものという意味で用いている。前号でも述べたとおり、本史料の第一冊から今回の前半、第三冊にかけては主に津和野領内の神職の間での席次などの格付けがそもそものきっかけであり、主題であった。それが今回翻刻の第三冊後半から第四冊にかけては、より詳細に津和野における神職が、いかなる神事に従事していたか、特に公的な神事を命じられていたかを教えてくれる貴重な資料と言える。

今回翻刻で紹介する年代には亀井家の代替わりや、幕府から亀井家に命じられた手伝普請・勅使饗応について無事を祈るもの、あるいは亀井家の当主・隠居とその子女、その実兄（福岡久留米有馬家）などの病氣平癒を願うもの、領内・領民の安寧を願うもの、亀井家の財政にもかかわる豊穰を祈るものなどがある。また、ときの將軍徳川家慶の死の前年、六十賀を祝い、祈禱を命じたと推測される記述もある。こうした、神事に際しては、「御初穂」「御賄」などとして金銭が神職に下付されている。その金額も金銀で三兩から百疋が多く、その額の通時的、或いは内容に即した分析は興味を引くところではあるが、紙数の都合もあり、今回は行わない。また、幕末の公的神事の増加にはひとつには、明治維新後、新政府の神祇官に強い影響力を持った、近世最後の当主亀井茲監のそもそもの嗜好・思想や、津和野出身の国学者・神職の関与もあるだろう。本史料以外の津和野の近世史料の発掘はこれからの課題と言える。公的な神事に携わり、亀井家からどう遇されていたかは、もちろん前冊同様、福場家の立場を強固にするために書かれたものであるが、一方で地域社会における神社の役割も見えてくる<sup>(3)</sup>ことが出来る。

### おわりに

前号に続き『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』の第三・四冊を翻刻して紹介するにあたり、ここまで若干の解題と、史料中にみられるいくつかの問題につい

て論じてきた。ほかにも採り上げるべき問題は数多くあるが、紙数の都合もあり今回はここまでとするほかない。今後の課題としては、同様に津和野城下の有力社であった弥栄神社大宮司桑原家に伝来の史料の有無、現在津和野を離れている福場家直系のご子孫のもとにほかにも史料がないかの確認も必要であろうし、翻刻中に何度か現われる藩庁側の奉行所の記録の所在確認なども今回は行えていない。翻刻の末尾に登場する津和野城下の未曾有の大火で失われたものももちろんあるだろうが、未紹介のまま埋もれた史料はまだまだ残っているに違いない。津和野は観光の町であり、歴史ある城下町、重伝建に選定された町として、歴史史料の発掘と紹介は今後ますます重要になると言えるだろう。

### 解題注

- (1) 国立公文書館蔵(内閣文庫)『大外記師資記』(古008-0270)第四冊。
- (2) 前掲注1『大外記師資記』第二〇冊。
- (3) 前掲注2『大外記師資記』第二〇冊。
- (4) 京都大学附属図書館蔵『職事方御切紙留』(「平松文庫」平松0208、請求記号3-シ-12)第二冊。
- (5) 拙稿「京都大学附属図書館蔵『御用帳雑記』ほか公卿平松家記録にみえる絵師の顔ぶれ」『広島女学院大学論集』第六四集、二〇一七年。
- (6) 児玉唯『中国地方における神社の文献史的比較研究』(二〇二一年十二月、広島女学院大学に提出の卒業論文)。
- (7) 国立公文書館蔵(内閣文庫)『大外記師武記』(古009-0271)第三七冊。
- (8) 前掲注4『職事方御切紙留』第二冊。
- (9) 前掲注1『大外記師資記』第三冊。
- (10) 堀新・深谷克己編『権威と上昇願望(江戸)の人と身分3』(二〇一〇年十月、吉川弘文館)。
- (11) 井上智勝『吉田神道の四百年―神と葵の近世史―(講談社メチエ542)』(二〇一三年一月、講談社)。
- (12) 天理図書館『吉田文庫神道書目録』一九六五年十月、天理大学出版部、二二三頁。

### 謝辞

今号も、鷲原八幡宮・総霊社宅野裕司宮司のご許可で翻刻を掲載できることに

感謝いたします。

なお、本稿は科学研究費「近世宮廷絵師の地方展開、およびそこにみる画壇構造の解明に向けた基礎研究」(基盤B、JSPS科研費JP20H01211)の成果の一部を公開するものです。

### 翻刻・総霊社蔵『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』

#### 【凡例】

- 一、本文中、常用漢字のあるものはこれを使用し、変体仮名は正字に改めた。ただし、助詞として用いられる江(え)・者(は)・茂(も)・与(と)・而(て)は旧字を存した。
- 一、本文には、読点および並列点を補った。
- 一、本文中の傍注は「」で括って、当該箇所の直後に挿入した。
- 一、翻刻中、「」内は翻刻者の補注である。

【翻刻】 総霊社蔵『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』翻刻  
[第三冊 原表紙]

由緒

福場飛驒守

【本文】

福場飛驒守奉仕之神社、寛政四年以後之由緒

祭礼八月十一日夕十三日迄

一、八幡宮

鷲原

但、由来之儀寛政四年御改之節、委細書出致候通、相違無御座

候、  
一、荒神社

但、右同断、

同所

一、八幡宮

但、右同断、

福川新々原

福川神主

三浦左膳持

祭礼四月十八日今十九日迄、十月六日今七日迄

一、恒産明神

但、右同断、

滝之前

一、原八幡宮

但、右同断、

御社地相知不申候、

祭礼三月十五日今十六日迄

天光山

一、天満宮

但、右同断、

鷺原

一、八王子社

但、右同断、

中座高崎

祭礼三月十三日今十四日迄、七月晦日今八月朔日迄

一、淡嶋大明神

但、右同断、

同断

一、恵比須社

但、右同断、

中座半牛

祭礼八月廿日今廿一日迄

一、八幡宮

但、右同断、

横瀬村

一、河内大明神

但、右同断、

野中村

祭礼九月十五日今十六日迄

一、八幡宮

但、右同断、

下高野村

一、河内大明神

但、右同断、

西谷村

祭礼九月十四日今十五日迄

一、八王子社

但、右同断、

市尾村

一、寛政九丁巳年九月六日、御屋敷内  
御鎮守八幡宮・天満宮、当年今正・五・九月御祓、三社大宮司江被仰付候

旨、御達御座候、

祭礼九月廿七日

一、荒人大明神

但、右同断、

神田村

一、稻生社

上市風呂屋

右御社、往古今小社御座候所、祭事者不及申、修覆等茂不相成三付、杉本社内  
御座候、然ル処、上市十組之衆今組中鎮守二仕度由御願申上、安永年中三彼

一、石上神社

鷺原瀬戸

地江小社再建立、二季賽神楽等仕来、其後、寛政九丁巳年九月、賽神楽等、



此以後御役所御聞届被成下候様御願申上候、尤先年御改之節<sup>者</sup>書出不仕候得共、此度書加へ差出申候、

## 社家世代

### 一、十四代

大宮司

福場土佐守治行

但、安永<sup>〔一七三二〕</sup>二癸巳年五月、御願申上、上京仕、繼目御裁許狀頂戴仕、<sup>并</sup>從是、御許狀<sup>江</sup>社頭大宮司<sup>与</sup>御書入<sup>二</sup>相成申候、尤神勤・社役之儀<sup>者</sup>、寛政<sup>〔一八〇〇〕</sup>十二庚申年迄相勤、閏四月、死去仕候、

### 一、十五代

福場飛騨守美唯

土佐守二男、初文会、其後、兵庫卜改、

但、土佐守嫡子權之助儀、寛政<sup>〔一八〇〇〕</sup>十二庚申七月死去仕候<sup>二</sup>付、私<sup>江</sup>社役相勤候様、御内意御座候<sup>二</sup>付、御願申上候所、願之通八幡宮社役相勤候様被 仰付、改名之儀、兵庫<sup>与</sup>願之通御免被 仰付候、尤神役等相勤候迄<sup>者</sup>、万事三浦此面<sup>江</sup>後見被

仰付候、

### 一、享和<sup>〔一八〇一〕</sup>元辛酉年、栗原若狭守卜席之出入御座候所、私家之儀<sup>者</sup>

能登守矩貞公之御代、無官<sup>二</sup>も<sup>一</sup>上席仕候様御証文被下置候処、此度御当役遠藤官大夫殿、右御証文差出候様、後見此面<sup>江</sup>度々御沙汰御座候<sup>二</sup>付、此面今其段申間候処、私宝物<sup>二</sup>仕置候儀<sup>二</sup>御座候得<sup>者</sup>、御証文、譬反古<sup>二</sup>相成候<sup>而</sup>茂<sup>一</sup>所持仕度段申上候得共、一応結構<sup>二</sup>被 仰付候儀故、是非御役処<sup>江</sup>差出候様被 仰候故、無抛御預ケ申候、其後、若狭守願出<sup>二</sup>付、先官順席<sup>二</sup>被 仰付候、

### 一、享和<sup>〔一八〇一〕</sup>二壬戌年、先達<sup>而</sup>上京之儀御願申上候之処、此度願之通御免被

仰付、繼目上京仕、於吉田表、正六位上飛騨守<sup>与</sup>任官仕、罷歸候<sup>而</sup>今以

来、年始御礼等申上候、

一、右上京<sup>二</sup>付、御銀三貫五百目拝借之儀御願申上候所、願之通御貸渡被 仰付候、尤返上之儀<sup>者</sup>百目宛拾ケ年返上仕、其余<sup>者</sup>拾ケ年相立候<sup>而</sup>可被 仰付旨被仰渡候、

### 一、文化<sup>〔一八〇四〕</sup>元甲子年、

御<sup>〔龜井忠實、養性院公〕</sup>奥<sup>〔龜井忠實、養性院公〕</sup>様 思召被為 在候<sup>而</sup>

茲休公御神靈被遊御祭置候処、此度御内々私<sup>江</sup>被遊御預ケ候<sup>二</sup>付、為御祭事料銀札五百目被遊御寄付候、

### 一、文化<sup>〔一八〇五〕</sup>二乙丑年正月、

御子様方御庖瘡之節、度々太儀仕候由<sup>二</sup>而<sup>一</sup>被遊御祝金百疋被下置候、

### 一、同三丙寅年二月八日、

大殿様御七拾御賀<sup>〔一〕二付、於</sup>

八幡社御祈禱被 仰付候段被

仰出、同十一日今十三日迄二夜三日執行仕、十三日卯之刻、為

御名代布施左仲殿被成御社参、其節法印<sup>〔二〕</sup>罷出不申、私計罷出奉幣

仕、御初穂金三百疋被遊御備候、尤此節於江戸

御姫様被遊御庖瘡候<sup>二</sup>付、十一日今十二日迄、於同社宵越之御祈禱被 仰

付、十二日申之刻、御屋敷<sup>江</sup>

御守札差出、御初穂金百疋被遊御備候、

### 一、文化<sup>〔一八〇七〕</sup>四丁卯年、

矩賢公御四拾御賀<sup>〔二〕</sup>付、於

八幡社、二月十七日今十九日迄、二夜三日之御祈禱被 仰付、十八日卯

之刻過、為御名代多胡玄蕃殿被成御社参、御神楽錢三百文被遊御備、御

札守等、十九日午之刻、御屋鋪<sup>江</sup>持参仕、遠藤官太夫殿<sup>江</sup>相渡、御側用人

中今御披露相濟候段、御沙汰有之候、

### 一、文化<sup>〔一八〇七〕</sup>四丁卯年六月廿五日、満水<sup>二</sup>付於八幡社、雨止御祈禱被 仰付候、

御初穂金二百疋被遊 御備候、

一、同年二月七日〔八二二〕迄於

八幡社、八社勸請〔二〕、五千度御祓被

仰付、御目録金三百疋被下置、〔并〕万事セ話仕候由〔三〕、銀式枚被下置候、

一、同六〔八〇九〕己巳年七月、

若殿様被為在〔龜井茲尚九代〕、〔七八六〕「八三」〔三〕

思召

茲休公御神靈被遊御祭置候之処、此度御内々私〔江〕被遊御預、尤此内、從

御奥様被遊御預候分〔茂同〕

御神靈之儀〔二〕付、御一所〔二〕仕預り候様被 仰付、為御初穂銀式枚被

遊御備、〔并〕

若殿様 御幼年中御祭置被遊候 天兒様、是又私〔江〕被遊御預、為御初穂

金百疋御添被遊候、

一、文化八辛未年八月廿七日、於

御屋敷、父土佐守年来御用相勤、〔福場治行十四代〕并 私儀

大殿様・御子様方 御用相勤、太儀仕候由〔二〕、御大紋拝領被

仰付候、

一、文化十癸酉年九月廿九日〔八三三〕迄、

矩賢公御病氣〔八代〕付、二夜三日之間、極御内々於 八幡社御祈禱被 仰付、

御初穂白銀壹枚御備、御側用人中、日々御参詣有之候、

一、同十二乙亥年、

近衛様御馳走御役〔四〕 被為蒙

仰候〔二〕付、前年御祈禱 御立願被 仰付、御役中百日之間、日供相備

候様被 仰付、御役被為濟候〔二〕付、御紋付御帷子一拝領被 仰付候、

一、文政十二己卯年六月、八幡社御願解成就仕候〔五〕、金五百疋被下置候、

一、文政三庚辰年十二月廿八日、御当役遠藤行十郎殿被仰達候〔八二〇〕者、以来年始

御礼之儀、御居間御三之間御鋪居内〔二〕被為請、

御上 御代替・私代替之節、於

御同所、御流頂戴候得共、

御留守年〔者〕、馬之間於御廊下、御家老中御逢対可被成、詰席之儀〔者〕溜之御間

二扣居候様、尤明後午年、年頭御礼〔此度御改被〕

仰付候間、初〔而〕之儀〔二〕付、御流頂戴可被 仰付候旨、且又外社家々願出候

儀有之候得共、決〔而〕不被 仰付段、被

仰出候旨、被 仰渡候、

一、文政四辛巳年、年始御礼之節、馬之間於御廊下、御家老中御逢対被仰付、

詰席之儀〔者〕溜り之御間〔二〕相詰、御坊主衆を以、御火鉢等被差出候、

一、同五壬午年、年始御礼御居間於御三之間御敷居内〔二〕被為 請、初〔而〕御流

頂戴被 仰付候、

一、同七甲申年、年始御礼後、於御用席御廊下、御家老中御逢対被 仰付候、

一、同年閏八月六日、三浦求馬死去仕候〔二〕付、翌七日喜時雨御社神役、私〔江〕被

仰付、并三浦家持掛り之社、不殘神役被 仰付候、

一、文政九丙戌年正月十日〔八三六〕迄、於 埴安社、二夜三日御祈禱被

仰付、為 御名代多胡主馬殿被成御社参、御初穂金式百疋被遊御備候、

一、同年同月十二日〔八三六〕迄、於

御靈社、右同断御祈禱被仰付、御名代右御同人御勤、御初穂前々同断被

遊 御備候、

一、同年同月廿日、於

八幡社、右同断御祈禱被仰付、御名代布施三郎右衛門殿御勤、御初穂

前々同断被遊 御備候、

一、文政十丁亥年二月十三日〔八三七〕迄、於八幡社、八社勸請〔二〕一七日之

間、五千度御祓被 仰付、御目録金壹両被下置候、

一、同年八月七日、

祇園社御普請出来<sup>二</sup>付<sup>〔六〕</sup>、

殿様、初<sup>而</sup>被遊 御参詣候所、栞原撰津介病氣<sup>二</sup>付<sup>、</sup>私罷出相勤申候、尤御初穂・御太刀・馬代等<sup>者</sup>撰津介<sup>江</sup>被下置候、

一、貞享三<sup>〔六八六〕</sup>丙寅年七月晦日、

茲親公<sup>〔龜井茲親三代〕一六六九一七三二〕</sup>御入部之節、御社領有之、社家八人 御出迎<sup>二</sup>罷出<sup>、</sup>同八月八日、左京之進計<sup>〔福場治次十代〕</sup>

御目見被仰付、御盃頂戴仕、鳥目式貫文被下置、御久米供御、<sup>并</sup>扇子箱差上申候段、寛政四<sup>〔八九二本史料第二冊のこと〕</sup>子年書出申候所、当年委讃談仕候得<sup>者</sup>、少々相違も御座候<sup>二</sup>付<sup>、</sup>改<sup>而</sup>書出候処、左之通、

一、貞享三<sup>〔六八六〕</sup>丙寅年七月晦日、

茲親公<sup>〔前出、龜井茲親〕</sup>御入部之節、御社領有之、社家八人、御出迎<sup>二</sup>罷出<sup>、</sup>同八月八日、左京之進計<sup>〔前出、福場治次十代〕</sup>於御書院

御目見被 仰付、御吸物被下置、御盃頂戴被仰付、御札守計献上仕候、

右之通、相違無御座候、以上、

文政十一<sup>〔八二八〕</sup>戊子年

八月 福場飛驒守<sup>〔福場美唯十五代〕</sup>「花押」図1」

増野一馬殿



図1 福場美唯花押

〔白紙一丁〕

〔第四冊 原表紙〕

由緒書

福場出羽介

〔本文〕

福場出羽介奉仕之神社文政十一<sup>〔八二八〕</sup>子年以後之由緒

〔二、十五代〕 福場飛驒守美唯」

一、文政十一<sup>〔八二八〕</sup>戊子年九月廿四日、三浦頼母祖父死去<sup>二</sup>付<sup>、</sup>服忌中御霊社神役相勤候様被 仰付候、

一、同年十二月十三日、

御霊社・壇安社社役、去申年<sup>〔八二九〕</sup>今当子年迄相勤候処、品先 御免被 仰付、御帷子・<sup>并</sup>銀五枚被下置候、

一、文政十二<sup>〔八三〇〕</sup>己丑年七月十二日<sup>〔八二九〕</sup>今十三日迄、於

八幡宮、御内々御祈祷被 仰付候<sup>〔七〕</sup>、

一、同年七月十七日<sup>〔八二九〕</sup>今廿三日迄、一七日之間、於

八幡宮、御内々一千度御被執行被 仰付候、

一、同年九月十日<sup>〔八二九〕</sup>今十二日迄、於 御小書院、五千度御被執行被 仰付、御

目録金式百疋、別段同百疋・御賄料銀三両被下置候、

一、同年十一月廿五日、

御霊社臨時祭式御願解五百度御被執行、三浦頼母服忌中<sup>二</sup>付<sup>、</sup>代勤被 仰付候、

一、同十三<sup>〔八三〇〕</sup>庚寅年八月朔日、淡嶋社御祭礼御久次不宜、増野一馬殿御出之

上、御久次引分候処、

御上御病難之由<sup>〔前出、龜井茲尚九代〕</sup>御座候、依<sup>而</sup>同日<sup>〔八三〇〕</sup>今二日迄、於 同社、御祈祷被 仰付、御初穂金式百疋被遊御備候、

一、文政十三<sup>〔八三〇〕</sup>庚寅年十一月十日、於江戸表、

殿様御病氣被為<sup>〔前出、龜井茲尚九代〕</sup>在候段御到來有之、依<sup>而</sup>

八幡宮<sup>二</sup>於て、十一日<sup>〔八三〇〕</sup>今十三日迄、於 道祖神、十三日<sup>〔八三〇〕</sup>今十五日迄、御

祈祷被 仰付、御初穂金三百疋宛、両社<sup>江</sup>被御備候、

一、同年十月十六日、於 八幡宮、

殿様御病氣御快方之御使有之候迄、日毎御神酒・御洗米・熨斗献備、御

祈念仕候様被 仰付、同十一月二日、御病氣、追日

御快方被為 在候段、御到来有之候<sup>二</sup>付、前件献備御止メ被 仰付候、

一、文政十三庚寅年十月廿一日、於埴安社、一万度御祓、本釜湯

立<sup>〔8〕</sup> 御願解被

仰付、出勤仕候、

一、同年十一月朔日、於 八幡宮、五百度御祓執行被 仰付、御目

録金貳百疋被下置候、

一、同年十一月四日、於 御屋敷、御側御用人馬場半兵衛殿被仰渡候<sup>者</sup>、今般、

日御碕大神宮被遊御勸請候間、飛驒守・桑原摂津介、来ル八日冬至<sup>二</sup>付、於

御小書院、御祭事被 仰付、此度<sup>者</sup>初<sup>而</sup>之儀<sup>二</sup>付、兩人祭事出勤被 仰

付、已後一ヶ年四度御祭式可被 仰付候間、忝人宛順番出勤仕候様被

仰付、御目録銀壺両被下置、以来ハ御賄料共<sup>二</sup>式両被下置候、

一、文政十三庚寅年十二月朔日、於 八幡宮、

殿様御病氣御順快<sup>二</sup>付<sup>〔9〕</sup>、為御札御祓執行被 仰付、御代参御側御用

人馬場半兵衛殿被成御勤、御神楽錢鳥目貳百文被遊御備候、

一、天保二辛卯年四月廿一日、大坂御役所火難除御願解、五百度御祓執行、

并<sup>〔10〕</sup>当年今来ル巳年迄三ヶ年之間、於 八幡宮、執行被 仰付候、

一、同三壬辰年四月三日、恒産明神百五拾年祭執行之義御願申

上、御免被

仰付候、

一、同年四月、

殿様思召被為 在、当辰年以後、御領分在々<sup>二</sup>至迄、山川土地祭被 仰

付、春分ハ從

御上、五穀豊穰之御祈祷被成下、秋ハ下として

上之御恩沢仰キ、且<sup>者</sup>山川之神<sup>江</sup>礼祭之心<sup>二</sup>而春秋兩度共、組別於一社祭

事執行仕候様被 仰付、依之御城廻組<sup>者</sup>鷺原凡中央<sup>二</sup>相当候義故、於 八

幡宮、三月朔日・八月七日、土地祭定日相定、執行之砌、春ハ御初穂金

百疋・御神酒壺斗、秋ハ御初穂計被遊御備、永世無怠執行之義被 仰付

候、

一、天保三壬辰年七月十八日、

殿様初<sup>〔11〕</sup>而御入部<sup>〔10〕</sup>二付、御居間御清め被 仰付、御初穂銀壺両被下置

候、

一、同年八月四日、

殿様御入部<sup>二</sup>付、御目見・御流頂戴被 仰付候、

一、天保八丁酉年七月、久佐村八幡宮大宮司山崎亘三男鎮香義、私養子<sup>二</sup>仕

度段、御願申上、願之通、御免被 仰付候、

一、同十己亥年四月十八日、福場飛驒守死去仕候、

大宮司

一、十六代

一、天保十己亥年五月廿日、

若殿様御入家相済候<sup>二</sup>付<sup>〔11〕</sup>、八幡宮<sup>江</sup>為御代参豊田勝助殿被成御勤、

御神楽錢貳百文被遊御備候、

一、同年六月廿二日、今般於江戸、

若殿様御家督御首尾好被為 済候様、於

八幡宮、二夜三日御祈祷被 仰付、十日、十二日迄執行仕候、御初穂金

二百疋被遊御備候、

一、天保十己亥年六月廿八日、

若殿様御儀、去ル朔日、初<sup>而</sup>被遊御登

城・御目見、御首尾能被為済<sup>〔12〕</sup>、御到来有之、為御歎御屋敷<sup>江</sup>為現忌



悦罷出申候、

- 一、同年七月四日、私・三浦頼母<sup>江</sup>於御奉行所、増野一馬殿被仰渡候<sup>者</sup>、福場鎮香儀

八幡宮大宮司繼目未夕不相濟候得共、頼母今上席可致段、被仰出候旨、被仰聞候、

- 一、同年七月十日、

若殿様御家督御首尾好被為 濟候<sup>二</sup>付、恐悦申上候、

- 一、同年七月十一日、江戸表<sup>江</sup>御使被差立候<sup>三</sup>付、

大殿様御隠居、

殿様御家督被為蒙 仰候恐悦状差上申候、

- 一、天保十己亥年七月廿日、

殿様御入部被為在候<sup>二</sup>付<sup>〔13〕</sup>、自力御祈禱被 仰付、

八幡宮<sup>二</sup>於て執行仕、

殿様・

大殿様御献札仕候、

- 一、同年八月五日、

殿様御入部被為 在候<sup>二</sup>付、御出迎仕、御屋敷<sup>江</sup>恐悦申上候、

- 一、同年八月八日、

殿様御入部、初<sup>而</sup> 八幡宮<sup>江</sup>御参詣<sup>二</sup>付御神楽錢鳥目三百文被遊御備候、

- 一、同年八月十四日、御入部初<sup>而</sup> 御目見、御居間三之御間御敷居内<sup>江</sup>罷出、

御礼被為 請、御流頂戴仕候、

- 一、天保十己亥年八月十七日、増野一馬殿被仰聞候<sup>者</sup>、未夕繼目不相濟候得共、御領分神職<sup>与</sup>出会之節、上席可仕候様被仰付候、

共、御領分神職<sup>与</sup>出会之節、上席可仕候様被仰付候、

- 一、同年九月十一日、当年五穀豊穰<sup>二</sup>付、

八幡宮<sup>江</sup>祝詞執行仕、賽謝申上候様被

仰出、則執行仕、御献札仕候、御初穂金百疋被遊御備候、

- 一、同年十月朔日、市尾村八王子社・中野村若宮社、同二日、牧ヶ野村河内

社、同三日、高野村八幡宮、祝詞執行仕候様被仰付、四社<sup>江</sup>御初穂銀式

両宛、御神酒料金百疋宛被遊御備候、

- 一、天保十一庚子年三月、繼目・位階仕度<sup>二</sup>付、上京仕度旨御願申上、先代

飛驒守儀御銀三貫五百目拝借被仰付、上京仕候<sup>二</sup>付、先年之通御銀拝借

御願申上候所、御厳法御時節柄<sup>二</sup>付、此度御銀三貫目拝借被 仰付、式

貫目来丑年今二百目宛拾ヶ年元年賦、残壹貫目大坂於 御役処、御取替

被仰付候<sup>而</sup>、当暮返上仕候様被 仰付、難有仕合奉存候、依<sup>而</sup>四月廿五日

出立仕、日数百日御暇御願申上上京仕、七月廿七日参内仕、位記・口

宣・宣旨頂戴仕、兼<sup>而</sup>御願申上置候通、出羽介<sup>与</sup>名相改、八月十二日帰着

仕候、

- 一、天保十一庚子年八月、

御霊社・壇安社御祭礼、三浦頼母実父服中<sup>二</sup>付、代勤被 仰付候、

- 一、同年九月廿八日、今度繼目・位階相濟候<sup>二</sup>付、自力御祈禱御願申上、於

八幡宮、御武運長久・御国家安全・五穀豊穰御祈禱執行仕、御献札仕候、

- 一、天保十二辛丑年正月三日、

殿様去子年十二月十六日、御任官被為 在候<sup>二</sup>付<sup>〔14〕</sup>、御屋敷<sup>江</sup>恐悦申上

候、

- 一、同年正月廿二日、今度 伝奏御馳走御役被為蒙 仰候<sup>二</sup>付、御屋敷<sup>江</sup>恐悦

申上候、

- 一、同年正月廿三日、伝奏御馳走御役御無難被為 濟候様、於 八幡宮、二

夜三日御祈禱被 仰付、御初穂金百疋被遊御備候、

御霊社・壇安社<sup>二而</sup>右同断御祈禱執行之儀、三浦頼母服中<sup>二</sup>付、私<sup>江</sup>被 仰

付、廿四日今廿六日迄壇安社、廿六日今廿八日迄御霊社、廿八日今閏正

月朔日迄於

八幡宮、執行仕、尚亦自力御祈禱執行仕候<sup>而</sup>、御献札仕候、

一、天保十二辛丑年閏正月晦日、日御碕

大神宮年中四度祭事執行之處、当丑年今来ル辰年迄五ヶ年之間御厳法<sup>二</sup>付、毎年壹度冬至御祭事被<sup>レ</sup>仰出、栗原撰津介<sup>与</sup>隔年御祭事出勤仕候様被<sup>レ</sup>仰付候、

一、同年三月十三日、年頭之 勅使御馳走御役御免被為蒙 仰、参向之 勅

使御馳走御役被為蒙 仰候<sup>二</sup>付、御屋敷<sup>江</sup>恐悦申上候<sup>一</sup>、

一、同年三月十八日、三浦頼母義、鉄砲獵之儀<sup>二</sup>付、御咎被<sup>レ</sup>仰付、御裁許相済候迄、

御霊社・壇安社神役被<sup>レ</sup>仰付候、

一、天保十二辛丑年三月廿二日、三浦頼母隠居被<sup>レ</sup>仰付候<sup>二</sup>付、跡式神役相勤候迄、

御霊社始奉仕之社、頼母持掛之村々神役被<sup>レ</sup>仰付候、

一、同年四月七日、伝奏御馳走御役御首尾能被為<sup>レ</sup>済候<sup>二</sup>付、御屋敷<sup>江</sup>恐悦申上候、

一、天保十三壬寅年正月三日、

殿様・松平讃岐守様御姫様、被為在<sup>〔前出、松平頼忠（七九八）（八四二）の女、光安姫〕</sup> 御縁組候<sup>二</sup>付<sup>〔一六〕</sup>、恐悦申上候、

一、同年五月十四日今十六日迄、於

八幡宮・壇安社、祈雨御祈禱被仰付、御初穂金貳百疋宛被遊御備候、

一、同年十二月廿一日、去朔日、於江戸表

殿様御拝領物有之、御暇被為蒙 仰候<sup>而</sup>、四日御発駕之由御到来有之<sup>〔一七〕</sup>、

寒中之砌、御旅中御無難被遊 御帰城候様、廿二日・廿三日

八幡宮、廿三日今廿四日迄於

御霊社、御祈禱被<sup>レ</sup>仰付、御初穂金百疋宛被遊御備候、

一、天保十四癸卯年二月廿五日今廿六日

御霊社、廿六日今廿七日迄於

八幡宮、天氣不順<sup>二</sup>付、風雨順時・五穀豊穰御祈禱被<sup>レ</sup>仰付、御初穂金

百疋宛被遊御備候、

一、同年三月十一日、中原村河内社<sup>二</sup>御用之竹有之、被遊御切、御初穂鳥目貳百文被遊御備候、

一、同年三月十三日、淡嶋社御祭礼之節

殿様幾久辺<sup>江</sup>御出、御帰懸、淡路社<sup>江</sup>

御参詣有之、御側御用人山田伝殿ヲ以、祭礼神式、何執行候哉御尋<sup>二</sup>付、湯立神楽古例執行之儀申上候得<sup>者</sup>、被遊 御覽度段被<sup>レ</sup>仰付候<sup>二</sup>付、寺戸

若狭執行仕候、御初穂鳥目三百文被遊御備候、

一、天保十四癸卯年六月四日、江戸桜田御屋敷辺、過日御近火<sup>二</sup>付、八幡

宮・天満宮<sup>江</sup>被遊御立願、火災御逃<sup>二</sup>付為御願解、

八幡宮<sup>江</sup>御名代礪江藤蔵殿、

天満宮<sup>江</sup>為御代参山田伝殿被成御勤、両社<sup>江</sup>

殿様<sup>〔前出、亀井茲監（十一代）〕</sup>御神楽錢鳥目三百文、

大殿様<sup>〔前出、亀井茲方（十代）〕</sup>同百文被遊御備候、

一、同年七月廿五日今廿六日、壇安社、

廿六日今廿七日迄於 八幡宮、祈雨御祈禱被<sup>レ</sup>仰付、御初穂金百疋宛被遊御備候、

一、天保十四癸卯年、

殿様<sup>〔前出、亀井茲監（十一代）〕</sup>、当年御歳十九歳、御歳廻不宜候<sup>二</sup>付、諸災消除御祈禱被<sup>レ</sup>仰付、

六月十五日今十六日、

御霊社御代参山田伝殿、十六日今十七日、

八幡宮御代参波多野矢柄殿被成御勤、御神楽錢鳥目貳百文御初穂金百疋宛被遊御備候、

一、弘化元甲辰年四月十五日、中原村於

河内社、御用之竹被遊御切候<sup>二</sup>付、御初穂鳥目貳百文被遊御備候、

一、同年四月廿六日、於江戸表、

有馬玄蕃頭殿御病氣<sup>二</sup>付<sup>一</sup>〔18〕、於

淡嶋社、廿七日〔前出、龜井茲監十一代〕迄御祈禱被 仰付、同晦日、

殿様被遊 御参詣、御神楽錢鳥目三百文・御初穂金式百疋被遊御備候、

一、弘化二乙巳年二月十四日、日御碕 大神宮御祭事、御嚴法中冬計執行被

仰付候処、御年限明<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、此内四季御祭事之處、当年〔八四六〕春・冬<sup>二</sup>兩度御祭  
事執行被 仰付候<sup>一</sup>〔19〕、

一、同年、

大殿様御病難<sup>二</sup>付<sup>一</sup>六月十八日〔前出、龜井茲方十代〕迄、於

祇園社、一万度御被執行被 仰付候、御目録金壹兩被下置候、

一、同年七月五日、恒産社御社付御紋付幕、横堀産子共奉納仕度段御願申  
上候所、御免被 仰付候、

一、同年、

大殿様御病氣<sup>二</sup>付<sup>一</sup>九月二日〔前出、龜井茲方十代〕迄、於

八幡宮・御霊社・壇安社、御祈禱被 仰付、四日、

殿様御参詣、被遊御神楽錢鳥目三百文・御初穂金式百疋宛被遊御備候、

一、弘化二乙巳年、

有馬筑後守様御病氣<sup>二</sup>付<sup>一</sup>〔20〕、九月四日〔前出、龜井茲方十代〕迄、於

淡嶋社、御祈禱被 仰付、六日、

殿様被遊御参詣、御神楽錢鳥目三百文・御初穂金式百疋被遊御備候、

一、同年九月十日、

御霊社御祭礼之節、穢有之御久次不宜候<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、百度御被執行被 仰付、

御目録金百疋・御賄料銀壹兩被下置候、

一、同年九月廿七日、先達

大殿様・

有馬筑後守様御病氣<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、御祈禱被 仰付候処、御快方之段御到来有之<sup>三</sup>

付、

八幡宮・御霊社・壇安社・淡嶋社〔江〕為御礼、

殿様御参詣有之、御神楽錢鳥目三百文宛被遊御備候、

一、弘化乙巳年十月五日、先達〔八四六〕而、

大殿様御病氣<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、於

八幡宮・祇園社・御霊社・壇安社・

下山社・柿本社・日輪社御祈禱被 仰付、

有馬筑後守様御病氣<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、於

八幡宮・祇園社・淡嶋社・松林山 天満宮・

柿本社御祈禱被 仰付候処、御感応有之、御病氣御平癒之由、御到来有  
之、為御礼、

九社御勧請於 祇園社御旅所、久佐組神職山崎常陸・山崎式部・近重  
渚・串崎但馬・静間内蔵之介・高子常盤・森脇勘ヶ由等<sup>〔二〕</sup>、神楽式被

仰付候節、御目録銀六兩・御賄料銀壹兩被下置候、

一、弘化二乙巳年十一月十一日、過天保十二丑年、三浦嚴之助幼年<sup>〔二八四六〕</sup>付、後

見被 仰付、

御霊社・壇安社御祭礼、始御祈禱後見申、精勤首尾好相勤候由<sup>二</sup>而御目

録銀壹枚被下置、後見御免被 仰付候、

一、弘化三丙午年、

大殿様御病氣<sup>二</sup>付<sup>一</sup>正月十二日〔前出、龜井茲監十一代〕迄、於

淡嶋社・金毘羅社御祈禱被仰付、廿一日、

殿様・淡嶋社〔江〕被遊御参詣、御神楽錢鳥目三百文、御初穂銀壹枚被遊御

備候、

金毘羅社〔江〕為御代参、草刈内記殿被成御勤、御神楽錢鳥目三百文・御初

穂銀壹枚被遊御備、猶又右兩社御祈禱<sup>二</sup>付<sup>一</sup>、御賄料銀七兩被下置候、

一、弘化三丙午年二月十三日、

大殿様御病氣、兎角不被遊御勝候趣、御到来有之、即刻〔二八四七〕迄、於

八幡宮御祈禱被 仰付、十四日、為 御名代、磯江藤藏殿被成御勤、御  
初穂金百疋被遊御備候、

一、同年二月十五日、於

恒産社、御小納戸中・小性中、於

淡嶋社御番勤無之、嫡子中・小性中、於

金毘羅社、御徒士中、

大殿様御病氣<sup>〔前出、龜井茲監十一代〕</sup>付、献上御祈禱執行仕候、

同十六日、於

八幡宮、自力御祈禱執行仕、献札仕候、

同十八日、於

淡嶋社、足輕小頭中、於

恒産社、棟梁中・細工人中、於

天満宮、伊賀中・伊賀格中、於

八王子社、馬屋組中、右献上、御祈禱執行仕候、

同十八日、於

八幡宮、清水町、献上御祈禱執行仕候、

同廿三日、於

八幡宮、堀藤十郎<sup>〔二二〕</sup>、献上御祈禱執行仕候、

一、同年三月朔日、当年丙午<sup>二</sup>相当、此已前六十一年前、凶作<sup>三</sup>付、此度、

御上 思召ヲ以、土地祭<sup>三</sup>相添、五穀豊穰・農家安全之御祈禱、御領分

中老組所<sup>二</sup>而執行候様被 仰出候<sup>二</sup>付、於

八幡宮執行仕、御献札仕候、御初穂金百疋被遊御備候、

一、弘化<sup>〔八四七〕</sup>三丙午年五月六日、於

八幡宮祈雨御祈禱被 仰付、御初穂金式百疋被遊御備候、

一、同年五月十日、日御碕 大神宮、当年、春祭事相止、夏冬、兩度御祭事被

仰付候<sup>〔二三〕</sup>、

一、同年

殿様、関東川之御普請御手伝被為蒙 仰候<sup>二</sup>付<sup>〔二四〕</sup>、御役首尾好被為濟

候様、六月十日、於

八幡宮<sup>二</sup>於て御祈禱被 仰付、御初穂金式百疋被遊御備候、

一、弘化<sup>〔八四七〕</sup>三丙午年、

有馬筑後守様御病氣<sup>〔前出、入留米、有馬頼大、龜井茲監表兄〕</sup>付八月十五日、於

淡路社於て御祈禱被 仰付、御初穂金式百疋被遊御備候、

一、同年十二月十八日、先達<sup>而</sup>、

殿様、関東川之筋御普請御用被為蒙

仰候処、御首尾好被為濟候<sup>二</sup>付、被遊御拝領候段<sup>〔二五〕</sup>、御到来有之候<sup>二</sup>

付、御屋敷<sup>江</sup>恐悦申上候、

一、弘化<sup>〔八四八〕</sup>四丁未年二月廿一日、小島清助弟才藏儀、私養子<sup>二</sup>仕度段、御頼申

上候処、願之通御免被 仰付候、

一、同年二月廿九日、才藏儀、大炊<sup>与</sup>改名居成、継目御願申上候処、願之通

御免被 仰付候、

〔二〕、弘化<sup>〔八四八〕</sup>四丁未年十一月、御領分神職共一統、

神葬祭御願申上候処、願之通 御免被 仰付候、

一、嘉永<sup>〔八四九〕</sup>二己酉年四月四日、於

春日社御祭事被 仰付、五日之夜、於

御屋敷、久佐組神職共山崎常陸・山崎撰津・山崎靱負・近重権頭・森脇

越後・串崎但馬・静間内藏之助・高子常盤・森脇勘解由・静間悠之進

等、神楽式被 仰付候<sup>〔二六〕</sup>、

一、同年七月十八日、五穀成就・風雨順時・病災除御祈禱、御領分一組一社

<sup>二</sup>而執行仕候様被 仰付、

一、八幡宮<sup>二</sup>而執行仕、御初穂金式百疋被遊御備候、

一、同年八月廿日、



八幡宮於馬場、流鎗馬御興行<sup>二</sup>付、御目錄金百疋被下置候、

- 一、嘉永<sup>〔八四九〕</sup>二己酉年十一月十九日、今度、養老館御普請御出来<sup>二</sup>付<sup>〔27〕</sup>、御祓被 仰付、御目錄銀貳両、御賄料銀壹両被下置候、

- 一、同年十一月廿二日、毎年正月十五日、於

御屋敷、自力御祓執之儀、御願申上候処、願之通、

御免被 仰付候、

- 一、嘉永<sup>〔八五〇〕</sup>三庚戌年正月十五日、初<sup>而</sup>於

御屋敷、自力御祓執行仕、御賄被下置候、

- 一、同年二月廿一日、御庭

春日社御造宮御出来、今般南都

春日社御勸請被遊候<sup>二</sup>付、御遷宮三天宮司<sup>江</sup>被 仰付、御目錄銀貳両御賄被下置候、

- 一、此内、神葬祭 御免被 仰付<sup>〔28〕</sup>、御国恩為冥加之、嘉永<sup>〔八五二〕</sup>辛亥年正月十五日、御祓執行、

<sup>〔澤主〕</sup>御上御在邑年<sup>者</sup>於 御屋敷、御在府年<sup>者</sup>祇園社<sup>二</sup>於て御祓執行仕候様<sup>〔29〕</sup>、

当年<sup>〆</sup>被 仰付、当年御在府<sup>二</sup>付、於 祇園社執行仕候、御賄料銀壹両被下置候、

- 一、嘉永<sup>〔八五二〕</sup>四辛亥年二月廿六日<sup>〆</sup>廿八日迄、御庭

春日社御祭事、当年<sup>〆</sup>毎年三日之間、御祭事執行被 仰付、御目錄銀三両御賄被下置候、

- 一、同年三月廿八日<sup>〆</sup>四月朔日迄、風雨順時・五穀豊穰御祈禱、於

八幡宮、被 仰付、御初穂金貳百疋被遊御備候、

- 一、同年八月廿七日、高野村於

八幡宮、御武運長久御祈禱、一組一社<sup>二而</sup>執行仕、御献札仕候、

- 一、嘉永<sup>〔八五三〕</sup>四辛亥年八月廿八日、市尾村於

八王子社、御武運長久御祈禱、一組一社<sup>二而</sup>執行仕、御献札仕候、

- 一、同年九月二日、中座村於 八幡宮、右同断、

- 一、同年九月十日、当秋、田畠作向宜<sup>二</sup>付、組々於一社、為御礼祝詞執行被 仰付候、於

八幡宮、執行仕、御初穂金百疋被遊御備候、

- 一、同年九月廿六日、御庭 春日社御相殿若宮社御祭事、毎年九月廿七日、

三天宮司順番執行仕候様被 仰付候、御目錄銀壹両御賄被下置候、

- 一、同年十月二日、春日社御祭事<sup>二</sup>付、舞執行被 仰付、御目錄銀三両被下置候、

- 一、同年十二月二日、御庭 天満宮鳥居、当八月折レ候節、栞原撰津介<sup>江</sup>御

圖伺被

仰付候処、於江戸

御奥様御病難・御火災之御圖之由、依<sup>而</sup>

天満宮<sup>二</sup>於て御祈禱之儀、撰津介<sup>江</sup>被 仰付候、

其後、江戸 御奥風呂場<sup>〆</sup>天井之煤<sup>江</sup>火付候ヲ、夜明方、老女見出シ候<sup>二</sup>付、火災被遊御逃候、依之為御礼、今般、

天満宮臨時御祭事被 仰付、御初穂銀壹両被遊御備候、

- 一、嘉永<sup>〔八五三〕</sup>五壬子年二月四日<sup>〆</sup>六日迄、於

八幡宮、

御前様御歳六十御賀御祈禱被仰 付候<sup>〔30〕</sup>、御初穂金貳百疋被遊御備候、

- 一、同年三月七日<sup>〆</sup>八日迄、於

天満宮、当春江戸 御奥向火災之芽有之候由<sup>二</sup>付、火災除御祈禱被 仰

付、御初穂金百疋被遊御備候、

- 一、嘉永<sup>〔八五三〕</sup>五壬子年四月廿日<sup>〆</sup>廿二日迄、御庭

天満宮臨時御祭事被 仰付、廿一日夜神楽式被 仰付、今般、

<sup>〔前出・亀井茲監十一代〕</sup>御上 思召被為在、祭事被 仰付候、御初穂銀三両被遊御備、

神楽式<sup>二</sup>付御目錄銀三両御賄被下置候、

一、同年五月十一日、天光山

天満宮九百五十年祭御願申上候処、願之通、

御免被 仰付、十九日、

殿様御遠乗掛、御参詣有之、御初穂金百疋被遊御備候、

一、嘉永五壬子年八月廿六日、

御霊社御祭礼、三浦豊後介母方祖母服忌中<sup>二</sup>付、代勤被 仰付候、

一、嘉永六癸丑年四月十六日、御城下、古今未聞之大火<sup>二</sup>付、

恒産社舞殿・通夜所・鳥居焼失、御神鉢、灯明人兵左衛門奉守護、私方

御祈禱<sup>江</sup>奉鎮座候、日御碕 大神宮御神鉢共々御焼失、風呂屋・ 稲荷

社舞殿・鳥居焼失、御神鉢、私奉守護、

淡嶋社<sup>江</sup>奉鎮座候、然ル処、上市十組鎮守社<sup>二</sup>付、早速小祠出来<sup>二</sup>而、八

月六日、本之社地<sup>江</sup>御帰座候、

一、同年六月廿三日、

八幡宮、雨乞御祈禱被 仰付、御初穂金百疋被遊御備候、

一、嘉永六癸丑年十一月七日、当四月大火之砌、御家中多人数御止宿<sup>二</sup>付、

心得宜由<sup>二</sup>而、御目録金式百疋被下置候、

八幡宮境内鎮座之神社、是迄由緒書出不仕候処、今般書記申上候神社

一、金毘羅社

右、讃州金毘羅社<sup>〔香川・金刀比羅宮〕</sup>明和七庚寅年御勧請、祭礼三月・十月九日、

一、鷺大明神

右、出雲国杵築大社之末祠鷺大明神御分幣、寺社御奉行牧村四郎治殿御役中、

福場土佐守御願申上、御勧請仕候、祭礼四月十五日、

一、新田大明神

右鷺大明神御相殿鎮座、文化二乙丑年御勧請、福場飛驒守代、祭礼四月十日、

一、厳嶋大明神

右、安芸国厳嶋<sup>〔広島県廿日市市・厳島神社〕</sup>御勧請、祭礼三・六・九月十七日、福場飛驒守代、

右之通御座候、以上、

嘉永七甲寅年四月

小野寺藤太郎殿

福場出羽介

# 翻刻注

〔1〕 七代亀井矩貞は一般に元文四年（一七三九）生まれとされ、前号以来、傍注でもそうしているが、これを信じるなら元文二年（一七三七）生まれということになる。なお、矩貞は三代絳親の孫にあたり、旗本菅沼定好（もと篠山藩主の家系だが無嗣改易となり弟が交代寄合・旗本として存続）の子で、亀井家傍系の養子となっていたが、本家を継ぐ。

〔2〕 神宮寺である幸栄寺別当のことか。

〔3〕 亀井茲尚は第七代亀井矩貞の五男で、文化七年十二月、兄矩賢の養子となったため、この文化六年の時点では、まだ世嗣にはなっていない（『三百藩藩主人名事典』第四卷、一九八九年八月、新人物往来社、六九頁）。

〔4〕 このとし、日光で東照宮二百回御忌の法会が行われ、例年の年頭勅使（答礼）だけでなく、従一位左大臣近衛基前も江戸に参向し、日光に登山した。『続徳川実紀』第一篇（一九七六年九月、吉川弘文館、七五〇～七五二頁）の文化十二年四月二十六日条には「近衛左大臣到着により。土井大炊頭御使して慰勞せらる。高家織田主計頭副てまいる。」とあり、日光での法会を終えて江戸に戻った記事、五月一日条には「こたび御法会により参向の近衛左大臣。〔中略〕御対面謁見したてまつる」と將軍謁見の記事、同月四日条には「公卿馳走」の「猿楽」があり、「左大臣には大奥にして。御台所はじめ御方々御対面あり」という。その接待役を亀井矩賢が命じられたということだろう。『三百藩藩主人名事典』第四卷（六九頁）の亀井矩賢の項には「同〔文化〕十二年には日光山において勅使接待役をつとめた」とある。『続徳川実紀』第一篇（七三五頁）の、前年文化十一年十月二日条には「来んとし四月日光山御法会により。参向の公卿。門跡の馳走人を命ぜらる」とあり、このなかに含まれていたということか。

〔5〕 「願解」は「がんばどき」と読み、立願したのち、それがかなった際の御礼詣りのこと（『大辞林（第三版）』二〇〇六年十月、三省堂、五七六頁）。この願解きが何の願いのものだったかは記されないが、このとし五月に矩賢致仕と絳尚襲封があった。『続徳川実紀』第二篇（一九七六年九月、一二三頁）の文政二年五月十六日条には「右

見国津和野の城主亀井隠岐守矩賢病により致仕し。養子大隅守茲尚をして領知四万石をつがしむ。此矩賢は。能登守矩貞が子なり。天明三年正月廿一日嗣子となり。おなじき三月十五日初見したてまつり。四月十八日家つぎ。おなじき四年十二月叙爵し。けふ致仕して後。文政四年二月廿九日卒す。年六十一歳。」とある。

〔6〕『三百藩藩主人名事典』第四卷（六九頁）の亀井茲尚の項には「同『文政』十年津和野に弥栄神社を造営」とある。

〔7〕『三百藩藩主人名事典』第四卷（六九頁）の亀井茲尚の項にはこのとし六月に津和野に帰ったことが記され、翌「天保元年江戸で死没する」とある。このあとたびたび「内々」のお祓いが命じられており、すでに健康を害していたものか。

〔8〕「湯立」とは『神道史大辞典』（二〇〇七年六月、吉川弘文館、一〇〇一頁）の大藤時彦による項目では「神前で大きな釜に湯を沸かし、巫女が神がかり状態となつて笹の葉をその湯にひたしてまくのをいう。巫女が神がかり状態になり、笹で氏子の人たちに湯を振りかける。これを問湯と呼んでいる例もある。湯立神楽といつて、平安時代の朝廷の神楽には湯立歌いうものがあつた。今日の民俗芸能に湯立を行う例がいくつか見られる。〔略〕島根県美保神社の三月十日の湯立神事では一年間きびしい生活を送つた一年神主が神事のさ中神がかりして年の豊凶などを伝える」とあるほか松尾恒一「湯立神事」が立項される。

〔9〕実際にはこの二十四日後、天保元年（十二月十日改元）同月二十五日、江戸で没する。享年四十五（『三百藩藩主人名事典』第四卷、六九頁）。

〔10〕『三百藩藩主人名事典』第四卷（七〇頁）の亀井茲方の項には「同『天保』二年三月家督を継いだが幼年であるために江戸に滞在する」とあり、襲封後すぐには津和野に下向せず、翌年「同月『天保三年六月』江戸を発し、七月津和野に入部する」とある。『続徳川実紀』第二篇（二六五頁）の天保三年六月十三日条に「其他いとまたまはるもの二十四人。」とあり「阿部」能登守。秋田信濃守。亀井能登守。松平信濃守ははじめてなり」とある。

〔11〕『三百藩藩主人名事典』第四卷（七〇頁）の亀井茲監の項には「久留米藩主有馬頼徳の二男として文政八年江戸で生まれた。天保十年亀井茲方の養子となり、同年六月、茲方が隠居したために十五歳にして藩主となる」とある。

〔12〕『続徳川実紀』第二篇（三八四―三八五頁）の天保十年六月条には一日に「月次の賀例の如し。〔略〕また亀井能登守が養子格助初見したてまつり。」とあり、二十一日に「石見国津和野城主亀井能登守病により致仕して。領知四万石は養子格助に継がしむ。この<sup>（以て養子格助）</sup>」とある。

〔13〕『続徳川実紀』第二篇（三八六頁）の天保十年七月一日条には「月次の賀例のごとし。〔略〕亀井格助家つぎしを謝して見えたてまつる。父能登守致仕を謝し。格助家人多胡丹波。牧主殿拝謁したてまつる。格助たゞちに就封のいとま下さる」とある。

〔14〕『三百藩藩主人名事典』第四卷（七〇頁）の亀井茲監の項には「同『天保』十一年二月従五位下、隠岐守に任じられる」とあるのは十二月の誤りか。『続徳川実紀』第二篇（四一九頁）の天保十一年十二月十六日条には定期叙爵が列挙され、そこに「従五位下に叙する者廿人。〔略〕亀井格助は隠岐守。」とある。

〔15〕『続徳川実紀』第二篇（四二六頁）の天保十二年二月二十一日条には「亀井隠岐守。池田山城守。佐竹彦岐守。こたび参向公卿の奔走人命ぜらる」とある。

〔16〕『三百藩藩主人名事典』第四卷（七〇頁）の亀井茲監の項の⑥正室には「光安姫（松平〔水戸〕讃岐守頼恕の女）」とあるが、同書（一九九―二〇〇頁）の松平頼恕の項によれば「天保十二年末から病にかかり翌十三年四月十六日死去、四十五歳」とあり、縁組は頼恕の死の直前に行われたようである。

〔17〕『続徳川実紀』第二篇（四七七頁）の天保十三年十二月一日条には「月次の賀例のごとし。〔略〕亀井隠岐守は就封の暇下さる」とある。

〔18〕『三百藩藩主人名事典』第四卷（三〇五頁）の有馬頼永の項には「この年『天保十五年』、尿血症（腎臓結核）を発病、以後一進一退を繰り返したがついに治癒せず、わずか二年後に志半ばで死去するに至つた」とあり、⑪薨卒年月日・享年の欄に「弘化三年六月二〇日二五歳」とある。

〔19〕本史料の文政十三年（一八二〇）十一月四日条に年四度の祭事と定められたが、同じく天保十三年（一八四二）閏正月晦日条に年四度の祭事を「御厳法」のため五年間年一回冬至の祭事のみ執行を仰せ付けられていた。その年限が過ぎたが、春・冬二回の祭事執行を仰せ付けられている。

〔20〕前掲注17にあるように翌年六月二十日に二十五歳の若さで没する（『三百藩藩主人名事典』第四卷（三〇五頁）の有馬頼永の項）。

〔21〕ここにみえる神職のうち山崎常陸・近重渚・高子常盤・森脇勘解由・串崎但馬は加藤隆久「神葬祭復興の一問題」（『神道文化論考集成』坤、二〇二二年八月、『神道文化論考集成』刊行会、一五四頁に所載の弘化四年（一八四八）、奉行所より神葬祭が許可された際の「御請申上候一札之事」に連署した「久佐組」のなかにその名がみえる。ほかにも山崎式部は同史料に挙がる「山崎亘」と同一の可能性があり、静間内蔵之助は「静間陸之佐」かもしれない。

〔22〕堀藤十郎は畑迫の堀家当主が襲名する名。国名勝堀庭園のホームページに掲載の「堀氏の歴史」によれば笹ヶ谷銅山の銅山師の家系で、八代から十六代まで藤十郎を襲名したといひ、天保八年（一八三七）に大規模な鉾脈を発見して以後、次々に鉾脈に行きあたつて、隆盛を極めたという。時期的に考えると、『島根県歴史人物事典』（一九九七年十一月、山陰中央新報社、五〇一頁）にも「中国の銅山王」と掲載された堀藤十郎（礼造）の父、十四代堀伴成か。

〔23〕前掲注19にあるように年四度の祭事を天保十三年（一八四二）から五年間、年一

歳は見当たらず、また「御前様」という表記も亀井家当主には違和感がある。

度にするよう命じられ、この前年弘化二年（一八四六）年限が過ぎたため、春・冬二度と改められたばかりであったが、春をやめ、夏に改められたようである。

[24] 『続徳川実紀』第二篇（五六四頁）の弘化三年六月条には「◎この月戸田川。六郷川。其他川々出水あり」とあり、このあとも水害の記録があるが、六月以前とすればこのことか。六郷川は現在東京都と神奈川県の間を流れる多摩川下流のこと。

[25] 前掲注24に六郷川ほかの水害後のことと書いたが、『続徳川実紀』第二篇（五七四頁）の弘化三年十二月十八日条には「虎門外玉川上水樋榑普請の事つとめし普請方のともがら賜物差あり」とある。ただし、手伝普請の大名の記述ではないかもしれない。また「川之筋」という本史料の表記からも玉川上水の江戸市中の石樋・木樋は語感が合わないように思う。

[26] 前掲注21と同様、ここにも見える神職のうち山崎常陸・高子常盤・森脇勘解由・串崎但馬は加藤隆久「神葬祭復興の一問題」（『神道文化論考集成』坤、一五四頁）に所載の「御請申上候一札之事」に連署した「久佐組」のなかにその名がみえる。ほかにも山崎撰津・山崎頼負は同史料に挙がる「山崎旦」、近重権頭は同じく「近重渚」と同一の可能性があり、静間内蔵之助・静間悠之進は「静間陸之佐」かもしれない。

[27] 養老館は藩校。このときの普請は旧地の養老館での普請だが、このとし亀井茲監は機構を改め、医学に蘭方医を導入し、岡熊臣を抜擢して国学を設けた。そのため普請と推測される。その原資は江戸深川の下屋敷を売却して得た一万両だっただろう（『三百藩藩主人名事典』第四巻、七〇頁）。この建物は、今回翻刻の末尾で書き留められる嘉永六年（一八五三）の大火で焼失し、のち現在地に移転して再建された。

[28] 嘉永三年と四年（一八五〇・五一）の記事の間にはさまって「此内」とあつて時期を特定できないが、前掲注21加藤隆久「神葬祭復興の一問題」（同九〇～一五九頁）および同「津和野藩に於ける神葬祭問題とその展開」（『神道文化論考集成』坤、二〇二二年八月、『神道文化論考集成』刊行会、一六二～一九二頁）によれば津和野の神職・国学者岡熊臣が主導して、寺社奉行からの達しをもつて領内の神職とその隠居・嫡子に限り、寺請制度を離れて神葬祭を行うことができるようになったのは弘化四年（一八四八）である。ちなみに、このとき、「御城下組」は「御城下惣代」の弥栄社「桑原撰津介」がかかわっているが、城下以外の神職を中心に弘化二年からの神葬祭運動の結果で、お達しの際に「城下組社家中」も「同席」と記されるので、福場家は直接は運動にかかわっていない。とすると、この条の「嘉永辛亥年」以降のお祓いをどこで行うかの記事は、本来、別の記事の可能性もあるが、現状では続けて記されている。

[29] 在府・在邑は藩主の参勤交代で、それぞれ江戸滞在と津和野滞在のこと。

[30] 十二代将軍徳川家慶（一七九三～一八五三）か。亀井家歴代にこのとし数え六十